

氏	名	坂大真太郎
学 位 の 種 類		博士（文学）
報 告 番 号		甲第547号
学 位 授 与 年 月 日		2020年3月31日
学 位 授 与 の 要 件		学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目		荒野のヘブル人の国制——『ユダヤ古代誌』の物語比較分析
審 査 委 員		(主査) 長谷川修一（立教大学大学院キリスト教学研究科教授） 廣石 望（立教大学大学院キリスト教学研究科教授） 秦 剛平（多摩美術大学美術学部名誉教授） 上野慎也（共立女子大学文芸学部准教授）

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

凡例

0. 序

第 I 部

1. テキスト解釈について
2. 本研究のテキストについて
3. 国制の発展
4. ゲルーシアの物語

第 II 部

5. 海辺と荒野の民主主義

第 III 部

6. 民衆の力
7. まとめ
8. 参考文献表

(2) 論文の内容要旨

本論文は、二つのテキストの比較がテキスト内世界の体系化に有効であることを示すことを目的とし、その一例としてヨセフスの著作とされる『ユダヤ古代誌』と伝アリストテレース『アテーナイ人の国制』を比較する。

序で上述の本論文の目的が示され、第 I 部では具体的な研究方法と研究対象である『ユダヤ古代誌』と『アテーナイ人の国制』の概要が紹介される。その後、国制の発展という視点で両テキストを比較することが正当化される。中心的な主題として取り上げられるのが「ゲルーシア」という統治機構である。

第 II 部においては、『ユダヤ古代誌』が描く、ヘブル人の荒野彷徨時代からカナン入植に至るまでのゲルーシアの衰退が、アテーナイにおけるアレオパゴス評議会と民衆との対立関係との比較において論じられる。

第 III 部では、ヘブル人の権力の源泉について、『ユダヤ古代誌』がアブラハムやニムロデらをどう描くのかという視点から、アリストテレースの『政治学』の政治概念と対照されつつ論じられる。『ユダヤ古代誌』が民衆全体を優秀者とする国民像を前提としている可能性を論じて本論文は閉じる。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本論文は、日本ではこれまで学術的研究の蓄積がほとんどなかったヨセフスの著作を正面から取り上げた研究である。

本論文の最大の特徴は、二つの異なるテキストの比較により、テキストの理解に新たな光を投げようとするその研究手法にある。この手法はすでに幾つかの先行研究において試みられているが、本研究は『ユダヤ古代誌』前半と『アテーナイ人の国制』とを国制の発展という観点から比較する点において斬新と言える。

（２）論文の評価

本論文は、日本においてこれまでは歴史史料として言及される程度のわずかな研究蓄積しかなかったヨセフスの著作に本格的に取り組み、ヨセフス研究の裾野を歴史研究以外にも開いたものとして高く評価できる。

『アテーナイ人の国制』とのテキスト比較により、『ユダヤ古代誌』がヘブル人の国制とその変遷について何を描こうとしているのかについて、これまで論じられることのなかった幾つかの点、最も重要な点としては『ユダヤ古代誌』を国制史として読むことができる点を浮かび上がらせることに見事に成功している。

他方、二つのテキストの比較の際、術語の詳細な分析の欠如や、安易なテキスト解釈の結果、比較の正確さという点で疑問が付される箇所も散見される。また本論文が冒頭で謳う、テキストの著者やテキスト背後にある歴史などを排除した読みが、続く論証中で貫徹されているとは言い難い側面も残されている。

将来的な課題として、先行研究とのより詳細な対話や、ヨセフスの他の著作および七十人訳聖書との比較、あるいは『アテーナイ人の国制』をフィクションとして捉えたうえで『ユダヤ古代誌』をもヨセフスによるフィクションとして問い直すような読解の試みがありうると思われる。

以上の点を総合し、ヨセフス研究を意欲的に開拓した点、ならびに物語比較分析の可能性を広げ、個々の箇所、例えば『ユダヤ古代誌』を国制史として読むことができる可能性や同著作を物語構造の比較研究の対象とする可能性について新しい洞察を開いた点において本論文は学術的に大きな寄与を果たすものであり、学位授与に値すると評価する。